
愛すること

Luka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛すること

【Nコード】

N8778Y

【作者名】

Luka

【あらすじ】

ねえ。

いつかあなたが大切だっと思える人が現れたら。

その時は言ってね。

“ 寝っころ。っころ。”

ブローグ

自殺志願者のあたし、ジュンコ。

いつも教室の窓から空を見上げては考えている。
いつか死んでやろうと。

この四角い部屋に閉じ込められてあたしは窮屈だった。
同じことをさせられて窮屈だった。

同じ黒い服を着て、
同じ髪型をして、
大人に教師にペコペコと頭を下げている。

あたしはその他大勢のガキじゃない。
あたしはあたしだ。

だから同じことはしたくない。

でも同じことをしなきゃ不良だとか言われる。

ただ、スカートを短くしただけ。

ただ、ボタンを変えただけ。

ただ、髪を茶色にしただけ。

ただ、マニキュアをしただけ。

ただ、メイクをしただけ。

ただ…

ただ…

ただ…

そんなあたしをみんな興味本位で見てる。

見られたいからそんなことをしているんじゃない。

あたしは“ここにいるよ”って言いたいただけ。

あたしは“生きてるよ”って言いたいただけ。

だって。

毎日が息苦しくて。

死んでいるのと変わらない。

生きているのか自分で分からなくなるんだもの。

だから、あたしは“ここににいるから”って叫んでるだけ。
誰かに見つけてもらうために。

あたしは“ここ”で“生きている”

四角い箱の中

朝、目覚めると重苦しい気分になる。
部屋のクローゼットに入ってる可愛くもない制服。
それを取り出して袖を通す。

学校という場合は、どうしてみんなと同じことをさせるのか。
不思議でなかった。

リビングに行っても誰もいない。
うちはママとふたりで暮らしていた。
ママは昨日、帰って来なかったらしい。
ママの部屋は昨日と同じように散乱したままだった。
ため息を吐くと、あたしはママの部屋を閉めた。

見たくない。
ママの部屋。

ママは昼間。

この部屋の中に男を連れ込んでやっていたんだろう。
その後仕事に出たきり帰って来ていない。

あたしは人として冷めているのかもしれない。

普通、自分の親のそんな現場を目撃したら驚愕するに決まってる。
けどあたしは何も感じることなくその横を通り過ぎるだけだ。

そして終わったママは、何も言うつもりもないのか。

あたしと顔を合わせることもしないまま、家から出て行く。

それが当たり前になっている。

学校であたしが問題視されていることも知らん振り。

別になんか言っただけじゃないかと思ってるわけじゃないけど、あたしは学校から冷たい視線を向けられている。

家を出たいと何度も思っている。
でも家を出れないことも分かっている。

あたしはまだ働くことも出来ない、ただのガキだから。

家の中も四角。
学校も四角。

どうしてこつも同じなんだろう。
毎日、同じことの繰り返しでイヤになる。

それがイヤなだけ。
ただ、それがイヤなだけ。

あたしはどうしたいのかも分からない。
無力な自分にイヤになる。

誰もあたしのことを理解はしてくれないだろう。

学校のクラスメートも理解はしないだろう。

テーブルの上に置かれている万札1枚。

今週はこれのお金で“生きなさい”という。

あたしはそれを財布に入れて、家を出る。

コンビニに立ち寄って、パンとお茶を買う。

そして歩きながらあたしはそれを食べる。

それがあたしの日課だった。

コンビニの前にはイカツイお兄さんたちがいつもと同じようにして座って話していた。

いつもあたしの顔を見てはまた話すという状態。

何か用があるわけでもないらしい。

ただ、見ているだけという状態。

そしてその傍をあたしは気にしないで通り過ぎていく。

ただ、気にしないだけ。

そうやって毎日、同じことの繰り返しだ。
毎朝会う、コンビニの店員さんも。
あたしに不審がることもなく。

ただ、あたしにパンを売る。

それだけのこと。

どこに行っても四角い箱の中にいる、あたし。
家も四角い。
学校も四角い。
立ち寄るコンビニも四角い。

どうして、こつも四角いんだろう。

あたしの目に映るものの全てが四角い。
持っている通学カバンも四角い。
生徒手帳も四角い。
筆箱も教科書もノートも四角い。

この世の中、四角いものだらけだ。
四角いものを見ると、ウンザリしてくる。

パンを食べながら、あたしは四角い箱の中へと入って行く。
門ではまた頭の固い大人の代表が立ってあたしを見据えている。
今日もまた四角い部屋で四角い紙に反省文なんてものを書かされる
だろう。

「小花！」
門を通り過ぎようとしたあたしに、先生が叫ぶ。

いつもと同じ。

門のところであたしを待ち構えている“センセイ”

あたしをジロツと見ては頭に怒りマークを出してくる。

「お前はいつもっ！」

怒鳴り声は四角い校舎の中まで聞こえるんじゃないかってくらいだ。

あたしは今日もまた短いスカート履いて、マニキュアつけて髪を赤く染めて、メイクをしているだけ。

ただ、それだけなのに。

どうしてそれがいけないんだろう。

あたしはそれが不思議でならない。

これをやめたらあたしじゃなくなるのに。

“センセイ”は“あたしじゃないあたしになれ”と言う。

いい加減、ウンザリしてきた。

それでもあたしたちは、“センセイ”に従っしかないんだ。

分かっているけど、それって酷くない？

自分自身を見失うんだよ？

“自分”というものが見えなくなるんだよ？

それをしたくないから、あたしはこうして“生きている”って訴える。

分かってはもらえないけど。

ま、分かって欲しいなんて思わないけどね。

「小花。放課後、生徒指導室に来い」

“センセイ”がそう言う。

だけど、それに答えることなくあたしは自分の四角い箱の中へ入って行く。

そんなあたしを見て、他の生徒たちは「またか」なんて思っているんだろう。

でもあたしは構わなかった。

“あたし”が“あたし”でいられるなら。

他のことなんかどうでも良かったんだ。

誰もいない空間

下駄箱で上履きに履き替えて校舎の中へ入る。
校舎の中はひんやりとしてて冷たい。

同級生や後輩がこっちを見ているけどお構いなしだ。
どうしてそんなにもジロジロと見るんだろうつて思うくらいだ。

3年のあたしの教室は1階の一番端。
この学校はベランダがある学校。
3年はベランダというより小さな庭だ。

よく女たちや男たちがその庭に出てはしゃべっていたり、キャッチ
ボールしていたりする。
あたしはそんなガキな彼らをボーと眺めているだけ。

ただ、眺めているだけ。

みんな、あたしには興味はない。
あたしがこんな格好していたって、別に気にしない。
授業中、勝手に教室を出て行ったとしても気にはしない。

受験生だから、余計なことに巻き込まれたくはないっていうのもあるらしい。

だからあたしはいつもひとりだ。
誰も声なんかかけては来ない。
かけて来られても困るけど。

「中学最後の夏休みかあ……」

ポツリと言ったあたし。
そんな声を聞く者もない。
もうすぐ、中学最後の夏休みがある。
あたしはまた家にいられない時間　とき　が始まる。

窓から空を見上げると、嫌味なくらいの爽やかな青い色をしていた。

「ほんと、嫌味だわ。その色」

あたしはどうしようもないくらいの疎外感に襲われる。
でも、それも仕方ないって思ってる。
それもいつものことだから、気にしない。

ただ、そう思ってしまっただけ。

いつものことを、ただ思ってしまっただけ。

授業中も休み時間もひとりだから、家にいてもひとり。
それはもう随分前からのことで。
あたしはそれを当たり前のことだと思ってる。
でも周りから見たら可哀想なヤツって見えてるんだろうな。

可哀相な目で見られてるあたし。
でも可哀相かどうかなんて、その人自信の物差しで決めるもの。

だからあたしは全然可哀相じゃない。

いやね、強がつてるんじゃないかってほんとにそうなの。
だからそんな目で見ないでよ。

机に突っ伏してても分かるその視線にあたしはウンザリしていた。
クラスメートたちがそれぞれの仲のいいコと話していても、時折こ
っちを見ている。

それに気付かない程、あたしはバカじゃない。

まだあたしはいい方だと思うよ。

教室の隅にいるあのバカップルよりはマシ。
クラスメートたちがいる中で、ラブラブ中。
抱き合いキスをして、男が女の胸に触ってる。

教室でよくやるよ。
ほんと呆れてしまう。

あの女よりはバカじゃない。
簡単にいろんな男に乗っかったやツよりは全然マシじゃないの。
確かあの女はついこの前まで他のクラスの男と付き合ってた
っけ。

「やっだ」

甘い声が教室に響く。

その声の方を見ないようにしているクラスメートたち。
だからあたしに視線を向けてるんだ。
そっちを見ないようにしているんだ。

いい迷惑。

あたしはその声を聞きたくなくて立ち上がった。
それを見ているクラスメート。

教室を出ると、あの女の甘い声が廊下まで響いていた。

廊下を歩いて、あたしは屋上へと上がる。

屋上には誰もいなくて、あたしだけの空間となった。

ここはいつも不良の先輩たちが屯っていた場所。

その先輩のリーダー格の人から、屋上の鍵を貰っていた。

あたしは不良ではないんだけど、妙に好かれていたらしい。
だからいつもここに来ていた。

先輩たちが卒業してから、この屋上はあたしだけの空間。
先輩たちのいないこの空間は少し寂しく感じていた。

そんなあたしだけの空間に来訪者が現れたのは、夏休みに入る少し前だった。

2コ下の男の子。

その子の名前はヨシキと言った。

彼は学校でも結構、名前の知れた不良だった。

その姉もかなりの不良だから、弟が不良になるのは分かる気がする。しかも彼にはい双子の弟がいた。

弟もまた不良だった。

ガシャン…。

屋上の扉が開いた。

そっちの方に視線を向けると、彼が立っていた。
金色の頭をした彼。

その目はまだ幼さを残していた。

「あれ。先約？」

そう言った彼はあたしをじっと見ていた。

あたしは彼から視線を外すと、グラウンドから死角になる場所で煙草を吸っていた。

「ねえ」

彼はあたしに近付きあたしの目線に合わせるようにしてしゃがみ込み、あたしの手から煙草を取った。
そしてそれを口にした。

「名前は？」

彼はそう言った。

あたしは彼の煙草を吸う姿を見ながら言った。

「ジュンコ」

って。

「ジュンコ先輩」

彼はその日から、妙にあたしに懐いてきた。

ニコニコとした顔であたしにくっついて来る。

人に好かれることなんかないあたしだから、ちょっと戸惑ってしまっただけどなんか居心地が良かった。

ニコニコとしている彼だけど、時折寂しそうな顔をしている。
だから思ったんだ。

あたしと同じ。

でも、実際はあたしとは同じじゃなかったんだ。

「ジュンコさんはさ、なんでいつもここにいるの？それにこの鍵
もなんで持ってるの？」

彼はあたしの隣で煙草を吸っていた。

あたしが煙草をあげた。

あたしと同じ匂い。

あの日。

彼は初めて煙草を吸ったのだと言う。

でも今はもうだいぶん慣れたのか、普通に吸ってる。

「まったく。1年が煙草を吸うなんて」
「教えてくれたのはジュンコさんでしょ」

そう言つて、吸つていた煙草をあたしに啜えさせた。
あたしはそれを手に煙草の煙を吐いた。

「ここの鍵はね、卒業した先輩から貰つたの。先輩もそのまた先輩から貰つたみたい」

あたしは彼と話することが楽しかった。

いつもひとりで、誰とも話すこともしなかった。

だから彼と話すことは、自分を解放出来る唯一の時間だった。

誰もいなかった空間は少し、賑やかになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8778y/>

愛するということ

2011年11月27日14時55分発行